

団長の稽古日記

「場当たり」

場当たりが始まった。

場当たりというのは、舞台セット、照明、音響全ての仕込みが終わった本番の舞台セットの中、照明、音響、舞台転換、役者の立ち位置の確認等、稽古場では絶対に出来ない確認作業の事を言う。

ここで演出である私のイメージ通りの

ものにしてもらねばならないわけで、当然ながらイメージ通りにならないと、そこは遠慮なくダメを出させてもらおうので、各スタッフさんにとっても、私にとっても相当集中力のいる作業だ。

その中でも、特に神経を集中するのは「幕開き」。

芝居が始まる最初ってのは、とっても重要だと思っているので、「幕があがる瞬間」にお客様の気持ちにグッ！と引き寄せたいというのが私の想い。

ただ今回のステージ、幕開きとは言えども緞帳幕はない。

そもそも昨今のお芝居では、緞帳幕を用いないお芝居の方が圧倒的に多いけれど、それでも平野作品ってのは、ほとんど緞帳幕を用いている。

理由としては、私が緞帳幕のある「お芝居」が好きだから。

何故好きか？うーん……。

立派な幕が劇場にあるのに使わない手は

ないと思っているし、あと子供時分に、

よく親に連れて行ってもらった琵琶湖温泉紅葉パラダイスっていう、今でいうところの健康センターの規模の大きい版

のような施設にあるステージにも、緞帳幕があったから。

ここに家族揃って行くのが私が少年時代の平野家の唯一の娯楽で、「ジャングル温泉」っていう、まさにジャングルを模した巨大な流れる温泉に入り、(本物のワニがそのジャングル風呂にいた！)

お風呂からあがると館内着に着かえ、施設のと真ん中に位置するステージのある大広間で繰り広げられる、様々なエンターテイメントを観るのがとても楽しみ

だった。(客席数は、2階席もあったので、500以上はあったのではなからうか?)

エンターテイメントの種類は様々で、売れない歌手のショー、ウルトラマンショー、手品、サーカス等、何でもやっていた。

それらのショーが始まる前は、必ず緞帳幕が下りていて、いざ！始まるってなった

時、BGMが変わり、徐々に場内が暗くなり、ゆっくりと幕が上がりはじめ、ステージの中が段々見えてくると、「何が

始まるんだ!？」というあのワクワク感が、たまらなく好きだった。

それに、これも子供時分に大好きだった吉本新喜劇や松竹新喜劇も、開演前は緞帳幕が閉まっていたし、あと！ほら歌舞伎！！引き幕だけど、開演前はちゃんと幕が閉まっているよね。

「幕があがる」というメリハリ感が、とても好きだったので、劇団ふあんハウスでも、どーしてもって事でもない限り、緞帳幕を使うようにはしている。

ちなみに、はじめて「新劇」なるものを

観た高校生の時、仲代達矢さん率いる無名塾の「ソルネス」では緞帳幕がなく、カルチャーショックを受けた。

終わりの幕が下りないから、「終わったのか?どうなのか?」分からなくて、でも

客席から拍手が来たり、客電が付いたので「終わったのか?」って分かった……。

その後、プロになってからも幕のない芝居はたーくさん観て来たりし、自分も演じた事もあったので、演劇人を気取るには

「幕」がない芝居の方がなんかいいのかもしれないが……平野恒雄のお芝居の原点は、「緞帳幕」だからねえ。

今回も出来る事ならば使いたかったけれど、劇場の構造上の関係で、緞帳幕なしでの開演とした。

だからこそ、余計に幕開き(幕はないけど)の最初のシーンは妥協はしたくなくて、照明が段々変化していくタイミング

と、そのあとに入る照明の明るさや、ヴァイオリンのリバープの掛かり具合、そして最初に登場する「知世」の位置等、何

度も何度も、照明さんや音響さんに注文を付けて、私が納得するものを創ってもらった。

幕開き(幕はないけれど……しつこい?)に結構時間を取ってしまったので、タイムテーブルを気にする舞台監督さんに申し訳なかったけれど、舞監の高橋さんは、「大丈夫です!」との返事を返してくれるので、とっても心強い。

そのあとに続く、場面転換を絡む箇所からはサクサクと進んでいくけれど、ん?舞台セットの窓から見える「海」の青色が薄くて白色が目立つ……

これも劇場の設備の関係上やむを得ないのも重々承知の上だが、ただ窓の向こうには海が見えるって状態にどうしてもしてもらいたかったので、照明さんにダメ元で希望を出してみたら、舞台転換で椅子

やカウンターを動かす際の確認作業で、場当たりが止まったタイミングを見計ら

って照明部隊は、私の注文を実現すべく、とてもスピーディーに箱馬や機材を持ち込みうまーく対処して下さって、場当たりが再開する頃には青い海が広がっていた。

これぞプロの技!どんな環境でも演出家の「こうやって欲しい」に極力近づけてみせるのがプロ。いやはやさすが!。

舞台上の転換は、さすがに稽古場通りってわけにはいかないので、何度となく中断したけれど、その都度、解決策を見つけ、場当たりは順調に進んでいったのでした。